俳諧發句集　夏

類題発句集夏部

蝶夢編

四月

更衣

春にも髪とまさへりふ衣更　紫貫

塩魚の裏ほす日也ころもかへ　嵐雪

花岡我を忘れても何の更衣　露沾

西川も娘持くやころもかへ　支考

更衣そこりに常我解にけり　嵐蘭

おつとへ奥殿式衣抑にけり　江戸 調和

衣のへまゝ仮蝶のそとき許　月下

綿ぬき

袷

衣更へ涼しき物を着まさく　佐渡 雲鈴

一枚子ぬきて親あらうまくも　江戸 百里

着かへ遠子もちうり更衣　宗瑞

起くのをあさ起し衣かへ　磨元

いまだぬぎや衣の浮のちらめく　木因

綿ぬきや浮見て夜着の出し支　千代

てらし昼一杯あら袷かな　涼菟

袷着ていささらくとあらうて　丶

一つ綿り袷になりや黒木買　其角

人先に紫をの袷や衣くく　許六

青簾

筑摩祭

葵祭

袷出で花さへ芥子の一重哉　来山

飲食のきたなひよ着る袷かな　吾仲

三位六位兎角青簾　氷雪

宵の姫よ嫁けや初青すたれ　江戸 蓼楽

我の道に川をあふれし青簾　大和 嵯松

くれぬ手よ物まぬきもてれ　老士

君が代やたらくたる祭も鍋の川　越人

あふひかなあかくて牛の角　言水

酔都りふひきて白ひゞ　来素

翁ある前様をかくて葵かな　乙由

日吉祭
千団子
灌佛

日吉祭衆徒やさくら太平記　湖春
そのかは桜の実あり千団子　文素
灌佛や稚子生れ出る時の兒　其角
灌佛や目出度事に寺参り　支考
灌仏や躑躅並ぶる比丘の庵　曲翠
あふの日やつかくは洗ふ仏たち　荷兮
灌佛や我死なさなく子取婆　近江 毛紈
生れ子も佛も前まへつくしけり　泥化
さて世に生れ見たき仏かな　助叟
灌佛や乳無あれも比丘尼寺　乙由

花御堂
笄の躑躅
夏籠
夏花
夏書
夏断

灌佛や乞食子抜る寺の門　冶天
何よりも先生れさせけり仏生会　尾張 馬洲
花御堂小僧ハ見習の通あり　乙由
かくれ家はつくも笄のつゝじかな　伊勢 全波
出るも入るも百日の夏籠日かな　支考
替へぬ紋我も夏の夏百日　千那
咲つゝや身を捨て八重の花　如行
夏を摘く片枝葉の乱まで擦れ　山川
古の誓り一筆ちまさん夜哉　業堂
それにしも奢春ハ八重夏断かな　越中 梅此

煮酒　新茶　古茶　風炉　麦秋

酒煮るや枚方客来のよる門　京 久風

舁籠を据へまぬ次戸の新茶かな　支考

祖父祖母の古くも世や新茶かな　文下

秋ぬいく古茶かはく崑や童の庭　近江 田扎

その道を行忘れけり風炉の家　浪化

疱瘡する児を見ありく麦の秋　岩翁

ありく見えし新茶し麦の畑　伊賀 許六

麦まくやさつさつく畑の先　非群

蜂掃の支度くや麦の秋　木導

麦秋や内さ蚕飼ふさかり　里菱

卯の花腐　青嵐　短夜

麦秋や立田も麦々たくらはい　尾張 素人

麦畑や付くしもをほさひし　京 沂風

麦くもや宿残ま似く笠の乾　蝶夢

空残る笠の卯の花くたし　荷川

長雨の雲ゆかぬ虫も青嵐し　意專

青嵐さら浸る渕や菖蒲池　嵐雪

雨あらり松の匂ひや青嵐　美濃 支浪

卯の花に兎も川さ流　加賀 文志

夢からの葉にとくへりて青嵐　三河 麦二

篗の軸や東の紙も月夜かな　宗周

夜のへり寝さへ夜の数かな　京 壹彦
みしか夜や二人念者の秋の月　北枝
夏の夜や崩て明し冷し物　芭蕉
夜ハ夜とて尊き背ハ明まから　言水
みしか夜や指さしてかくし鶏かな　冰花
短夜やたてし芝居の櫓長き　方山
明やすき文背のつらく入霧かな　加賀 芦本
短夜や夏の東も流れ行　己菱
みしか夜や此人として棺の音　既白
短夜や皆子に眠る兎とも　赤 鯉風

芋植
娘の子干
青さし
芥の花

牡丹

芋植て門ハ葎の若葉かな　江戸 里露
晒も織の白しや娘あかり　利牛
書法や手まりも植まるべし　芭蕉
石臼も庭に捨れし芥の花　桃隣
蒲井て椅子まもりし芥子の花　希因
こがさこ名ハれて石はまぬ花　女 瓔菜
廣庭にゆきうごく牡丹かな　智月
蝿胡蝶も飛てくせぬ牡丹かな　枚風
此の時人に厭ハれ白牡丹　李由
虻來て荷ふく這へ牡丹かな　徐寅

芍薬

此為り是ハと花にほたんかな　寿吟
莟ひらく花より華やくる牡丹かな　文考
簾越の揺あをさ牡丹かな　伊賀 風絃
月影の露にあらまし白牡丹　尾張 木導
菱火ハ溯まて見る乾牡丹かな　雲裡
添入も夜ふきよ家る牡丹かな　湖月
京ちそふに小僧の提し牡丹かな　周防 磯沢
芍薬やほたんの下に立かくれ　加賀 料蛙
芍薬や餘所に牡丹の門ちらし　長門 皺枇
芍薬の廿日の欲ハなかりけり　巴静

花葵

色々と咲てさらしあふひ哉　才麿
せりよて蒼に移も葵かな　九兆
花葵一つ二つ十程咲かけり　尾張 若有
たんたんに暑ハ日数や葵向日　可風
雨の日やつ提てりかすめ川さき　信徳
足跡の鉢にまあるや二つ三つさき　治砬

杜若

鉢に移る義のきらきらや杜若　去来
かきつばた澤やあらはの幹　芭蕉
杜若足へ水をあふれけり　壬角
駒下駄をはなしまたる杜若　世武

傘にすがりつゝかたの月見かな　木導

華八ツに立葉もみえし杜若　伊勢 句空

ぬれ色を持ておもふや杜若　伊勢 賀枝

手のとゞく水際うれし杜若　伊賀 宇象秾

すゞしくと花の家にもかきつばた　京 林紅

逢坂に巻く紙やさらはかきつばた　江戸 沾圃

蒲の葉に雨は降ても塀の中　依佗

紫の雨を増してやかきつばた　文素

素袂やさても紅の玉巻葉　和鳴

玉巻や鳳もさハらぬ玉菖蒲　之仲

玉巻芭蕉

玉巻菖

一八

茨の花

罌粟

一八や虫より婦の曇る雨　伊勢 季覧

一八やきのふも九重の花の数　凉菟

ふれしくる人の尻ゆく荊かな　長虹

袖はゞく子どもの泣や花いばら　伊賀 己明

針ありて蝶もまどふや野薔薇　乙由

さはらぬ茨まじりに蓋とられ　何柱

袈裟かけて比丘尼のとるや花いばら　乙紀

いく度の世に寄罌粟の花　支考

首もおひて二本ちりけし芥花　智月

吹ねとも風もなし罌粟の花そせい　洒堂

押拾ぬ先はちらぬか芥子の花　含秀

まくまくと白きはけしのけしの花　嵐蘭

雷のひゞきにちるやけしの花　尾張 蕉笠

名乗て去るや芥子の一重かな　落梧

けしちるや静に読ゝ咲きもろし　近江 此径

菜髪の白きにうつる芥子散る　木因

きし畑や皮隠くしてちるけし　卓袋

花のかみよ似てくれし芥子の花　林紅

又牡丹切客有けし散る　越中 浪化

けしちるく蝶も吹よ来にけり　かゞ 意桂

風車

岩茨

躑花

薬掘草

卯の花

牡丹ちる質は軽し芥子の花　美濃 有琴

余の花は入りふ空の見るや風車　希因

蝶も夏超えてふゝめ風車　越前 巴文

岩菱や浪にいそき及腰　越中 一鷹

系り見の道教へきりゝ躑り花　乙由

公家なかして思ふも拗し菜抜草　乾貢

うの花やくゝれ梅来及こし　芭蕉

卯の花や川辺の陣所の加茂諸　支角

卯花や空の光くずく朝月　露治

うの花は月夜に見て山鳥　諷竹

苣の花
若楓

うち返す麦畠にちる苣はな　昌房
卯の花の跡ゆくらん雲の川　季来
谷向ひ咲かゝるや和木垣　曲睡
見ゆるれやちらん八はんの夜咲ん　伊賀 万平
卯の花やつかみ遊ぶ枝の有り　風麦
壱人なにかきおさみ嘆く苣乃花　蝶羨
見ゝ楓葉色ゟあるも一さの葉　曲翠
子規ゆくも鳴りや見る楓　文考
若葉迄のまはりの関や若楓　涼菟
かへるゝ秋かゝる秋なつかしの花　嵐雪

若葉

余の葉から青さも青し若楓　可風
大寺も見えぬ若葉の奥深し　北枝
和葉ふくさゝりと風すゝ　惟然
うも水に照りて若葉や椽の先　近江 川高
一葉つゝ鍬の田にあかる若葉かな　江戸 沾荷
あれ見よ出山見ゆる若葉ぞ　山蜂
百代わ銭の付ける和葉かれ　羽黒 呂丸
此夜な月の葉か谷も若葉かな　高吟
梓のまに揺らるゝ見る葉かれ　尾張 沐水
山鳩が衣ふの眠さし若葉かな　蓮之

若葉
葉桜
桜の実
夏木立

流くさく八様の末て見ろ若葉かな　松雀
折りあめく見るまゝ花の若葉かな　宗周
まく花の雨ほしのまる見る若葉かな　湛水
葉桜や寺中の人の静まりぬ　布用
さくらや蝶しまれむかしひ　琴吹
葉桜や飛びてぬるぬるにから　鍱皷
花をこしの風を渡りて桜の実　若足
実桜やとて八鳥の喰ひ残しけろ　一路
夏木立中に葉の木の暮らされ　柴丸
雪しれまくかゝらぬ夜木立　賤歌

木下闇
木葉蔭

鐘の音も罵りのゝ夏木立　篤貫
夏木立こちこ木つゝふ猿の声　安枝
盃よりもあまる日影や夜木立　希因
寺前の儀をましし夏木立　常阿
下照る蝉かつの蝉の声　嵐雪
下闇や指ぬ畳く鳥の声　除風
山鳥もちかへる木闇なし木立かな　子春
牛の目ひかる山路や木下闇　白尼
傘ぬうらかく出る蔭られ　六芳
夕立へや蔵にわたり影川の路　文草

夏野

夏山

桐の花

楢の葉のおちても栗の花盛り　如行

茂る木やおちこちまよふ風の数　猿雖

光りあふ夕日の山の青さかな　太来

夏草や橋臺見えて川通り　其角

明礼の棒さしけり夏野かな　亨彩

秣負ふ人を枝折の夏野かな　芭蕉

啼きふれ虫の声ふ夏野哉　一笑

滝の跡も川となりし山　野水

夢多く浪截てのまま夏野山　美濃　怒風

夏山ひて也うし桐の花　千角

花柚

美人草

青山椒

手鞠の花

枳殻の花

白丁花

桐の花桂せかるく尾長鳥　巴静

柚の針の庭も流れ白ひかな　車庸

二盃目も又まだ柚の白き哉　岩翁

身うちまるき下ふんばれや美人草　李吟

裏つり垣乃夕らず美人草　安藝　其滴

白ひあきう青山椒や夏の暮　加賀　正哥

手鞠花手枝よ動や皆の声　乙由

小手鞠や垣のあちこち咲て咲　出羽　壺中

垣乃見の亦り兎つく枳殻かな　曽北

さふひの気や四角にはさくてる花　尾張　一玲

舊爪
藪椿
棕櫚の花
竹の子

何の葉か我借くありあんまつる袋　乙由
藪つばき門は葎の若葉哉　芭蕉
何乃卑下されけさけし藪椿　かゞ 北枝
乙ゝ氣にて掃きもちらぬ棕櫚花　越後 其翠
椶の葉に音は寺へ土産の花の名　星朝
竹孫子や太かく延して来てらく　伊賀 若蘇
竹の子や児の歯ぐきのうつくしき　嵐雪
たけのこや稚き時の絵のすさび　芭蕉
筍や人ぬすみ出し垣の上　去芳
竹の子やうらけく側く手傘　木導

篠の子
常盤木落葉

竹の子や越戸八てたち様く　蘿守
筍や何ぞくゝぬ弟子と踏むら　支考
たけの子や伸らして八穀をとる　越中 桐夕
竹孫子や留守の家よ愁太郎　公夫
筍哉竹よなりしく竹の垣　素山
竹の子やゆかへ容して鐵瓜つき　以之
筍やまはるもあかれまたのそき　近江 千梅
きくの子や独やじと根も起る　備中 傳彦
清滝や波にちり込む青松葉　芭蕉
常よ我いふきく竹の落葉かな　支考

岩梨

露

葵

蓮の浮葉

郭公

柊の落葉まじりに花咲けり　浚川

岩なしや山の道芝忘れぐさ　山城 任口

朝もらし花岩梨折か猿衣足　千那

夜もまかる露の葉広し瓜の花　曾北

葵噺に使りやよくつかせけり　江戸 莫山

蓮親の世渡中にも浮葉哉　京 明水

蓮池乃深さ忘るゝ蛙かな　荷兮

郭公格子あるゝ鳴けふもおなし　守武

ふりしきて空耳もなし郭公　望一

有明の池そのまゝ押してうつす　宗因

ほとゝぎす鳴や五尺のあやめ草　芭蕉

ほとゝぎす啼〱飛ぞ忙し　、

郭公大竹原をもる月夜　、

ほとゝぎす声横たふや水の上　、

木がくれて茶つみも聞や子規　、

時鳥しく〱啼て雲入まで　凉菟

ほとゝぎす寝て起て橋の川　来山

乞食や何我木隠り郭公　曾良

ほとゝぎす鳴や湖水のさゝ濁り　丈草

川添我月の夜すせんわかれ　嵐雪

杜鵑なくや雨夜にすみれ　大下木
なくく夜なかのふ一声けさ三声　尚谷
時鳥きゝたいかありて待もれ　我黒
その夜に雨きゝ知らぬ子規　秋風
提灯の灯に論なしわたりきて　重好
郭公説のまゝ里に雨ふりかゝる　木因
杜鵑きくや日ぐらし一夜所　古竹
引かくおなじ新葉より滝のたきつ音　禾　文鱗
郭公不月夜八ツまで時鳥　助叟
いつくも一羽くのわたりす

湯雨や暗暁に鳴る郭公　立志
わくく紙寸一針すてて立にけり　尼　芳樹
深山くおなじ雲踏みゆくし　露川
子規なくやちくさと続山　支考
似く都我よれく時や子規　句空
子を踏みて枕も婦人のわたりきて　其角
啼にさへ笑くしのに郭公　すて
なかくおなじ雨のかゝる我鳴くてすゞ　浪化
傘なく来る一声なり子規　朱拙
郭公鳴のあさしぬ格子かな　野坡

咲清の比哉の中や子規　羽紅
落つる女夜あり音の時鳥　含粟
わくおる鵜の裡すかやかの跡　卅七
夕の出早く入ぬ時を鶉ゝ　稲月
京
三夜月をかくなかり夜深くおれ　敏石
蜀魂なくや木の間の角櫓　史邦
湖に寸月夜鳥の溜やえ　望東
一夜て家故さゝふる郭公　万子
咲まく八二階より時鳥　松瀧
深くおれ跡さ山の夕ぐより　此竜

鶯菴へ

老鶯

わくおる夜鳴くのまくらし　乙由
深川は菖蒲一静く卯月の欠　ゝ
吹けは散尖起きる深川おれ　唐元
我名なる所をかくやも村鳥　嵐士
子規夜は木伐代ゝ乱れし　古山
鳴やまた鶯遠へゝ蔵られ　去芳
鶯や売残へくたて春鶯　許貢
うくひすや笋藪に老を啼　芭蕉
鶯や笠も来かゝる卯月き　支考
たらちねの鞍のちる老のいちら　玄武

誅皷鳥

岩や籠りて鶯の声を啼　京 此行

うき我を淋しがらせよかんこ鳥　芭蕉

やかましく出て啼を聞布穀　文艸

しら髪文まで聞く気やかんこ鳥　猿雖

啼ハ聞け帰ねハ淋し誅皷鳥　浪花 斬界

鉄炮の藝古の的やかんこ鳥　氷花

植捨し山田も青しかきこ鳥　舟泉

かんこ鳥我をまねくや見ても〳〵　乙由

旅ねして人もいはずら誅皷鳥　近江 素君

留主にしてもひきゝたかんこ鳥　都不覚

咲ハまだ若き哉啼やかんこ鳥　希周

鳴くさへ淋さ和人く誅皷鳥　麻父

何方向く居り帰りて見ても布穀　伊勢 何聲

かんこ鳥舟あまるふの岸より河　烏酔

芒かとハる葉をみて去誅皷鳥　乙筑

誅皷鳥捨ほ浦ちまて日ハ暮れ　玄武

かんこ鳥何も部を答へきら　上総 雨林

淋しさ咲め鄰竭をみてかんこ鳥　鎌菱

かくれ耳ハ咲へくかんこ鳥　江戸 栗更

夜啼き宿人ありし鳴鳩　巻阿

方同

葭原雀

鷺樹ニ入

青鷺

蝙蝠

啼立し鵜老羽音や夜の舟　睦三

葭の穂のちりてせはしよしきり子　竜次

よしきり子啼や暗の音高み給　寄川

和歌菜をかへれは葭よしきり子　亭李

いさらゐ川風に吹るよしきり子　出羽 北而

よし切や履覚て吹る居の苣　下総 鳥朝

樹鷺や那山の夏の芽しき　筑後 己靜

青鷺や代うく泊よかい出ら　准鴉

青さぎや世乃なかに子菊え　正秀

蝙蝠の手の暮るかし徒費　桃隣

乏蚕

蝉初声

蛍取

蚯蚓出

蝙蝠の手の暮るかし徒費　北枝

かはほりや錆つく社戯ひして　江戸 星稚

蝙蝠や花の梢も暮に近　吐月

のはらや銀まて我ふか出来　諸九

乏蚕もおのおのゝて戦すまう　其角

麦藁の家してやらん土鴨　智月

初蝉や背中をつかんて鳴かる　杜希

初蝉や梅雨の晴間躍あし　孟遠

蛍ひろやませとる氣の流へ　三河 浮流

蚯蚓出る人の跡の跳し瓮中　丹後 南畝

蜘の子

蜘の子や第の玉をふみちらし　妻波

蜘の子や糸引習ふ許嫁松　朝佛

蠅取蜘

孑孑や蠅取蜘の身をくらひ　丈邦

孑孑

ほうふりや水の月影のつくる　嵐雪

浮さかりやむかしは腰の水の泡　蝶愛

飛蟻

枯もして椙と教へて飛蟻哉　孝鍵

やかく代出る引きて羽蟻哉　素冷

蚕

這出よかひやか下の蚕の声　芭蕉

拾ひ事たまりて居るや蚕　曲翠

飛のひく古かくれ翫やひまくる　芦本

蚊

月代をさへ支立より蚊の声　杏雨

蚊のひとつ川来稲る宵の暑かな　猿雖

蚊柱や行る湯殿口　雲竹

山里の蚊を昼中に喰れけり　去来

我庵は蚊のちいさきを馳走哉　芭蕉

血吸て身を忍ぶ蚊の憎さ　丈草

雨の夜は筆の先ゆく蚊の声　二水

船中や蚊は追てもにかくれ　司竜

蚊帳

蚊の声や喰ふ先を見せ　路青

やすみし後涼しく蚊帳かな　不玉

生饗

鮓

釣上ぬく鰹魚の匂ひや二三日　浪化
網下りへ魚の動きや鰹船　當町
鉤釣て鰹振り上る月夜かな　言水
鎌倉を生て出けん初かつを　芭蕉
小舟にも帆はかけの生饗より　風吟
大勢の中へ一本かつをかな　嵐雪
門も青葉鰹遊きれ秋つかな　沾足
也銭さし青葉と八咲けし饗売　美叢
鮓すしや家の廣葉の折らへ置　木因
鮓まくら姫もふすれハ一夜鮓　伊勢 冢次

簾の代衣角

凄からぬ石の枕や一夜ずし　宗陽
蘇も立ぬ丼りひや簾の代衣角　じゝし
秋けりく折まし蔬菜むつの　その
牛の子まくら入ん簾のゆくる角　伊賀 近之

五月

菖蒲

志らず庵の長雨しよ菖蒲かな　嵐雪
ゆかしけ袖とあやめの匂ひかな　秋色
屋根ふきと並ひて菖蒲葺れ　乏角
内裏へさし葉菖蒲くひりぬ菖蒲葺　摂津 櫟笑

蓬ふく
菖蒲酒

網床戸極まで売まるあやめかな　江戸 竺下
川風の菖蒲吹まる浣の所　曲翠
我宿や法師殺とくあやめ哉　凉菟
あやめふく軒ねは日和の同類かな　、
葉蘭る菖蒲や去のゝ影の業　小春
切口の地の水まで川あやめかな　介我
泥足の京へかへくや菖蒲売　乙由
何やふく影や詠香子の庵　佐渡 楚璞
着て行蓮生の宿と菜にける　駿河 曙山

菖蒲湯
菖蒲刀
薬玉
印地打
粽

浮湯ぞ沼にて刻よる菖蒲哉　素角
銭湯の仮妹まて湯ふ菖蒲哉　言水
さゝ湯は金を鉄の口登れば　長崎 卯花
一刀入て菖蒲に九節　嵐雪
君が代のためしに菖蒲刀かな　越中 見推
薬玉や蝶の花衣みくと逃　言水
くす玉や蔓藻の葵は宰相の色　江戸 沾象
京見るの脇指は老子く印地打　備中 拙芭
文字形くひとくちかし粽包　嵐雪
限藤の底蔭みみて鍋粽　岩翁

幟

羅きぬ女子の縫ふ粽くれ　越策
百かの粽の中に寝ハなし　越前　吃嚢
村八日の仕事にかく粽ヶ餅　越後　代柏
張ひさして女子を投る鳥ちかさ　但馬　重秀
見下せば青柴まあふ河幟乳　称志
夏風と吹さそう起世の跡あらう　支考
奈良の末見おして紙幟　千甫
太平の末あり風の象あり　吾仲
幟見んや初与子本通まで　廬元
筋書ハもんしく地ぬ飛くかんむ　近江　松睡

菖蒲の兜
茱萸摘
加茂競馬
競馬足掛
休酔日

宝徳の破風まで並みる波の本ら　孟遠
きのふの兜紙細工せよ世紀　伊勢　披長
かさゝにも後の兄を姿甲られ　子周
百草や見忘よ女盛も乞馬掌　盤谷
競る見て御夜ありの晴ゞ飛　朱迪
毛の色やるの競り見宮は　冰花
七度の外我祭きり足をそろへ　許六
蕨きりて川間の川や足掛　嵐雪
傍見も休植る日の草履と笠　芭蕉
休捨ていさ萬薬を備ん　以之

五月雨

五月雨も藪々中の花さくら　信徳

さみだれや蚕煩ふ桑の畑　芭蕉

さみだれや色紙へぎたる壁の跡　、

五さ月や銚の室居をあかくして　宅貢

日をみれば六月らしく暑し五月雨　常牧

五月雨は何ぞ我等く也淀の人　鞭石

湖水よりまさりありけり五月雨　太来

あふらくに三日月拝む五月かな　、

五月雨や傘につるゝ小人形　其角

戌あたる小路よ晴れぬ五月雨　尚白

五月雨に菖蒲を抽く啼のあと　山城　言佐

さみだれや隣も暗く成にけり　如行

五月雨や植田の畔をかいつぶり　泥足

たれ世あらく縄手川の軒を又さ雨　渭橋

さみだれや雲の梢に晴れてきき　支考

五月雨や蓑傘にても乳まで濡れ　尾張　亀洞

やてもく　さらく降つ夏の雨　芦本

さみだれやいつ迄棚も飽きん　従古

さみだれは亀や淀川大和川　桃隣

ひね麦の味なき空や五月雨　木節

梅雨

さみだれや傍へつけたる木枕　蒼虬
寝覚の又ハ聖ら宥五月雨　寿丸
五月雨や打さし来る夜の鐘　鬼士
見へもせぬ川かくやさみだれ雨　梅路
夕立のかしら見へる梅雨かな　文字
麦の雨晴れやらうて鎧ぬる　不ノ

梅雨蛙

咲く花やまくらもなく梅雨の中　不玉
蓮の葉に濡れる蛙やつゆの晴　洒堂
川風に狐火さへやはれる晴　史邦
梅雨の後牛に里は蛙かな　延年

五月闇

たゞしく岸にて鳴く五月闇　抑志
きぬ子の座敷の毛やさ月やみ　楚舟
網もちや松はふ五月闇　雪芝
梅の花さき残るさつき雲　録芝
ともすれ松明ちやさ月闇　李夕

虎ヶ雨

さびしさや虎ヶ雨の雨つく数　去芳
壊もの井にふるや虎ヶ雨　一瓢
つれなき石に来へし虎ヶ雨　残馬

夏の月

夏の月御油より出て赤坂や　芭蕉
市中は物のにほひや夏の月　凡兆

花かつみ
まこも刈
藻の花

破鐘のひゞきも悪し夜の月　北枝

手の戸や暑さ哉月に取入も　伊賀 我峯

夜すがらに秋の更くし寝覚かな　巴静

川向ひに見えし居の留守夜の月　伊勢 樗良

娵まやさ哉ことに翁ひから花かつみ　信濃 篤翁

まこも刈路を狭むる水の音　但馬 耶牛

藻の花によめしくすがたの衆　北枝

あさらけく藻の花むく流れ　凡兆

藻の花に鋏ひかりて蟹の髪　胡及

藻の花やかいれて亀の甲　紀伊 風後

藻刈舟
萍の花

中に子を盥に乗せて藻刈舟　後吾

そぞろ須哉るる藻刈舟　哉家

一あらし比良の浦やもかられね　冰花

うき草や侍の兄の枕くれし　嵐雪

萍やけさは西もちの岸に咲　乙由

うき草やおもはぬかたひとつ近く咲　加賀 若桂

うき草やおもはぬ八文咲かから　大和女 千代

萍や花ひくく高く漂ふ　能登 雨表

うき草や蝶のちから持ておる　予代

萍やこうれども又月水上　山李

玉簪草

う起草や咲けらく所あり咲　筑後 流牛
德つまの窓にひらくや時斗草　対馬 花暁

百合

百合の花たてゝも何も向さら　支考
あら笄に火や焼されん百合の花　、
姥ゆりやとらで下葉の錆の気　素竜
寝る庭横切り眼くや百合の花　雨考
手を出すや百合名高く谷の凪　未残
とみれ入せ加まらぬしら百合ぞ　素閑

紫陽花

紫陽花や藪を小庭の別座敷　芭蕉
紫陽花や沽黄に志も無試化也　巴静

あちさゐや僧も中々見に咲直し　巴丈
紫陽花にれ下りけりや見宮川　芦丸
紫陽花や船岸寄り蓋の何　呉一

紅の花

眉掃を面影にして紅の花　芭蕉
手をつくやうれ紅や紅の花　涼菟
勝のよそ染りしも紅さ起　尾張 其笛
り来ら縫ゝ札扨れん色に気　作者不知

萱草

くるん草の気をとかゝや忘憎　来山
萱草の花や暑さを取ぬ　涼菟

下野の花

志てつ昔や日に起されぬもの色　青嵜

石菖蒲
花菖蒲
金銀花
金仙花
空豆の花
桑の實
蓑菜

石菖り月のしづくや新床下　猿雖
石菖や岩ふる浪の泡の中　既白
紫羅欄の中に清まれ花菖蒲　江戸 八朶
忍冬の花咲野生や金銀花　乙由
空豆の花咲たりけり麦の露　孤山
桑の實に行つる浪に娘られ　尾張 一風
蓑菜や置まとハもり麦の煙　希因
蓑折くや跡見る住連ハちヨね　尾張 伯秉
さびしさや牡丹の後の葉の香　江戸 嵐哉

朝露草
寝盃子
鉄線釣子
酢漿
早松茸
藜

蓑菜やきのふも今日ハ古き花　加賀女 雨笑
衣僧の筆にさゝれぬ朝露草　乙由
いちご取手より蛇の尾や草の上　杜若
こゝろから寝盃子喰ふ子桃　但馬 史邦
蛇衣泡思し起寝盃子かな　木卯
挿肩もうもかは撫子の花かな　上野 兎山
鷺の振かゝる其の花踏しや　荷兮
のとはぎや惣かくまりし庭の隅　伊賀 耕萩
早松茸二月の瓜も熟あれ　因幡 秋庵
我むかし藜を杖つく笑にかな　惟然

莧
茄子
にがき瓜

厩から捨の芽越して生へり莧　江戸 呂扇
こぼれきや色紙からに出る茄子　涼菟
樵夷尻寄りのけぞる茄子かな　秀石
籠の目越ぬけて萌る初茄子　南部 了石
ひらくも露ふすりと茄子　晩嚢
紫かくれ雷雲や初茄子　吾吹
初なすひその露ふくの色を出なり　播州 雨人
菊実に鷺きたり茄子　江戸 乙河
花ともさりのえ夏や初なすび　元陽 仏母
あさつきやかしこへ嫁の孫　我思

干瓜
糸瓜
南天の花
栗の花
杜鵑花

越瓜の土耳ころぶ葉陰かな　江戸 伊珊
干瓜やうつかけて乗る小舟　武陵 冬角
花よりも嗅ぐ枝よ糸瓜かな　七里
南天や雪の花ちる手水鉢　巴静
ぬけかの頬ひき落る梁の花　出羽 正秀
晴ちる夜空のたくらの風　胡冬
山路から隙ある日の風　風併
鶏なく心に栗の花　播州 半捨
花も隠り日の照る五月かな　春波
足る田を流れて八朔しつし　耿菜

合歓花
赤楊梅
廿胡桃
花石榴
篠木
桃の花
花橘

長の女世哉咲ては紛れの花　越中 乙汀
ゆふ夜光木にも見へで合歓の花　駿河 馬光
合歓さくや馬もつまりく長羅手　加賀 三四
赤山や人をすさみぬ世くるゝ　北鯤
見る雨よあか風や赤よ花さくら　飛坡
篠木や女双帯の秋の花色　京 鶴水
うき頼を詠るもてまへにけり　尾張 蘿交
たちばなや宮家机のあかり添　秋風

樗
山梔子
青梅
梅漬
麦藁

樗やちまたに社家の光かな　江戸 子珊
たちばなや思の袖ある白ひ鳥　加賀 禹洗
咲んとし河ちやあの花墨　芭蕉
浮し秋の花ひり吉野河あわ　伊勢 乙雪
口明しの花まりしと咲にけり　浮石
青梅や桑とる手に見やもめ　万子
青麦哉この刈や女子の塗木履　木導
麦藁光や杖わく枝哉住ゆく　江戸 禾仲
交り哉麦藁の塵は小袖かれ　秋色
麦あまさや笊一つゝふく日の酒　伊勢 望翠

杏
枇杷
若竹

起臥のしへ葉も流れぬ雨や枇杷　　京　瓜流
若竹の竹とならで枝葉なし　　涼菟
やはらか竹や雉子が宿の藪あつし　　支考
若竹やまかる出数層の覚　　曲翠
垣ほ破るその若竹を加へ根に　　素堂
一枝あまりはせ繁竹の若葉かな　　仙化
早竹ゆ竹の踏む枝かな　　雲鈴
わか竹や雪のおもさもまだしらず　　乙由
風ゑらに来て吹出しや若竹　　千代

竹の皮散
田植
早乙女

風も吹け落さぬ竹の皮　　荻人
淋しくも庭を並ぶる田植あれ　　自悦
糸文の笠見て出る田うへかな　　支考
田植哥まて揃ふ歌のさらひかし　　車行
腰のしく合衆中も田植かな　　吏明
枚あまりにせらしら数田植哉　　文䉼
一畝しに思ふかへをや田植かな　　玄梅
春月の後を抱へくたうへかな　　許六
方くに能見合せて田うへかな　　乙由
早乙女やとかれぬ哥かな　　来山

早苗

早乙女や子の泣方へ植てくり　沾荷

早乙女つゝきそろへやかさの数　闇指

汁鍋は笠の雫や早苗取　其角

早乙女や祭りやうは拾ひかろ　涼菟

雨わらし背中に就よ早苗かな　芭蕉

早苗入て命の長き仏まつり　木因

仏供羽ありにこきく早苗かな　浪化

苗の色まで子鍋を晩鍋も一つかな　落梧

田仕事の中小も清き早苗かな　李由

青田

一番も二番も草の青田かな　曽北

田草取

涼しさの浮きし田の面の青さかな　涼菟

麦刈て中に青田の見ゆるかな　丈草

草取の足も息つく青田かな　支遊

畦豆もともにひろがる青田かな　楚舟

日の入りて夕気づく青田かな　治吉

やけ塩を背中に置し田草取　之角

雷のつゝきはらしや田草取　槐妖

草取の笠くるむや田の畔の紀　武中 宇白

猿の尻かくれて暑し田草取　可風

笠の緒のやかくはら二番草　蝶夏

豆植
粟蒔
蛍

豆植ていりてかへん升の市　和泉 素月
粟蒔や鶉も見ぬ日なくなれ　麁元
蛍見や船頭酔ておぼつかな　芭蕉
昼見れば首筋赤き蛍かな　、
迷ひ子の泣くつかむ蛍かな　流水
つゝ影も見えし素袷遠さかる蛍かな　涼菟
暁の露陰帰る浮きら飛　尚白
夜の更る程と大きな蛍かな　汶村
田の水載見せて蛍の流れかな　北枝
手に取ひやを遠ふ見ゆる蛍かな　万乎

挑灯の消てさびしき蛍かな　正秀
草にも木も蛍くさきて水の青　、
集あふて猫あやしむる蛍かな　乙由
すいと行水際涼し飛蛍かな　牧童
水草の蔭ると見えて飛ぶ蛍　祢志
刈草の匂ふ上に光る蛍かな　英波 一髪
飯焚火の煙りをくゞる蛍かな　許六
蛍火や手にもたれ夜の方　怒風
得るひやすき草や露の袖の裏　青君
夜々晴て虫に家ある所かな　駿河 阿青

蚊遣火

手まくらに孝の字の寝見られけり　信濃　富鼎

裏の戸へまはりて見れば蚊遣哉　京　可磨

消て又何とも知らぬ宿の蚊やり　奥州　信

蚊やり火やむかし忘るゝ縄暖簾　百里

魚の骨火鉢まくさし蚊遣けり　江戸　風洸

一夜しも無精まふ蚊遣かな　工孫

片隅へやりても見ゆる蚊遣哉　越中　方堅

姑のあふぎたてたる蚊遣かな　蓮之

ひやり火や小さき家のさし向ひ　美濃　一葉

ともすれば煙へ蚊遣の家　兆而

蚊柱

我宿や細き蚊やりの行も也　京　耳考

蚊柱をきるやの割る夕の雨　常矩

かゝる後の岩橋かゝる之　其角

蚊柱や傾つれて出る月　由之

蚊柱の倒れぬ三日の夜　敬壹

の法師や立ちぬ脊戸に立かゝる　越後　一朝

蝸牛

去歴を花に崩てかくれけり　深義

かくつむりのさくれは遠き哉　壬角

蝸牛しや捨て折りても蝸牛　如行

蝸牛忘れ草のきらきられ　冰花

蜒　蛭

七たひ八起の家やかたつふり　智北

露の系に義を見せけり蝸牛　伊勢 秋至

萬形も道教へけりかたつふり　来児

引そこね雅にかけれ寄る流る堂　上野 素瑞

朱欄有一節したゝし蝸牛　止弦

雨ふれは角ふりたてかからの案　常陸 己峯

見ま帰しく角を出しけり蝸牛　京 去髪

己か為に家ありなから枝さくなき光くて　几兆

何事か独蓄ふ書てやあくるま　素波

手取の扳乃血に乳し蝸牛とん　為有

螳螂生

螳螂の子ふみもてらん風車　枕山

蛇衣をぬく

谷陰や一つ八拾かくく蛇のきぬ　飛径

喜しや鉤の手まり蛇乃衣　雨北

鼓虫

舞〻もかくや舞〻虫の夜こゝろ　望髪

舞〻や水よりのかく乳情あり　丹波 宝耳

水鳥の巣

鴨の巣や若もかりの足休め　荊口

波ちりぬ浮ういてやみさこれも　甫良

鴻の背よたてらふ鴨のうき巣は　粛山

鷭の巣やりもさ滞る氷のまく　とし

かもの巣の見へもありかくれもら　強通

鷺の巣
水鶏

取上てそつと戻すや鷺の巣　枕儀
叩かれてたゝくてもなき水鶏かな　桃水
足音はおのれたゝくか水鶏かな　李下
木づたひをしてゐる水鶏かな　泥去
叩くまはおし流さくかれ舟　了ん
雷は七つ過て叩く水鶏かな　露川
雨雲を吹て降ては水鶏かな　吾仲
九十九秋聞ぬふりもくかゝれ　倩歳
枝折戸のかけうちしも長き水鶏かな　越中 氷麦
抑さしていぬる秋の秋水鶏舟　文素

翡翠
羽抜鳥
鵜川

たゝかぬと啼やみぬ夜を水鶏かな　越後 竿馬
と飛ぬれは水に流れなくかれかな　三河 杜鳥
翡翠や羽根よそ切てなる流　露川
川せみやのまさこそ泥つくり　備中 加襄里
追れて枝にしばしく羽ぬけ鳥　乙明
羽衣の表見ゆる也はぬけ鳥　希因
おもしろうてやがて悲しき鵜舟かな　芭蕉
鵜の顔に篝こぼれて哀なり　荷兮
うつゝをのまふ人の間に立ぬ　信徳
首立て鵜のむれのぼる早瀬かな　浪化

魚簗お

鵜舟火や魚の心を篝の魚　北枝
ゝの影や鮎も川瀬へ逃より　如行
篠けむる鵜縄は近き鵜や鮎胡　桃隣
十二羽の鵜の中に居る鵜匠かな　李尋
ゝうひの我ゝ口あく桧子かな　宗友
背戸の片側は月見鵜飼の艪舟かな　可吟
出川ゝ立る鷺を見る川ゝの簗　乙筑
しつゝひや世よつゝ身ゝもつゝく　以哉
石川や簗ゝ川瀬ゝ濁ら　桃隣
簗守や濁ら鮎歎く月僅ひ　伊賀　配刀

鹿子

灌仏の日に生れあふ鹿子かな　芭蕉
矢の下に母は乳吸の鹿子かなゝ　立志
つきれても振る鹿の子ハ角取　去芳
萩の子も雨ふる鹿ハ鳴や山留　桃隣

照射

猪も吹うゝしき鹿くゞりかな　正秀
ゝ杖ふ弄る鹿の火りし鹿　嵐雪

納ひ将　火串哀

雲まを折や尾越の鹿の納ひ　嵐竹
よ鹿鹿や急て火串は忌み鳥　長門　班象

丁鍋

鳴し鍋の鶴の夕哉かくも人ゝ有　林凡

小鰷

毎の束哉志了流しこし小鰷貴　其角

帷子
辻乞
夏羽織
晒布

六月

かくひくの秋あけぬのやみ出茶　配刀
帷子や帯もさゝれて風ぞ吹　杜若
つく〳〵の影ひ八やれし錦石　支考
み桔梗扇子濡るゝや辻ヶ乞　以老か
かくひくに花まかく夏羽織し　伊賀　木飲
吹夜まさゝ波つくれし夏羽織　乙粉
つ出の花我よとうさらし売　涼菟
橋人居敷の赤き布使し布　越後　楚由

氷室
氷餅
一夜酒
祇園會

六月の寒様乃色きら氷室哉　言水
帷子ぬ世界へ出まら氷室哉　武者　挪吹
数あるく涼の衣裳や氷室ぞ　希因
氷室哉かしら我雲もつれてそ　文素
骨折を見おもせしく氷室哉　尾張　子礼
今まその寒さかくれ〳〵ひ出おもひ　翠樹
ぬけさ崖く涼おとろ〳〵氷餅　飛苑
是もつか解うのぐれ見やも　伊勢　色夕
探くの夜てまを有あり一夜酒　古角
円鉾や松京風へ入佐山　治位

嘉祥
祇園涼
半夏生
土用
富士詣

月ほこや兒の顔なる化粧　濤良
あけ札や祇園冊のつら並ふ　涼菀
錦もまそて引出けり函谷鉾　京 雲鞍
爪紅の指さしつまむ嘉祥菓子　許六
銀まく美形のりせよ立ちん　方山
半夏生や那菜のきかみ休せ鳴　許六
那小服ゐる鷺そうてう半夏生　近江 泰勇
覚来れ土用のへなん人まてろ　枚風
痛む父我背ひやす土用干　伊勢 鼓足
参るたて雲を涼みて富士ほか　出雲 風水

富士垢離
鞍馬竹伐
水無月祓
御祓
川社

富士ありや以ても雪のあられ川　立圃
竹切りや枚の嵐乃ちし鞍馬　山城 麻父
竹きるや雪れ夜明さのあれも　一扇
星代名能して無ふ由祓られ　勾空
受もちや半分に御祓川　素雪
墓もくひ肉のかくや涙の家　嵐重
禿髪も帯にたちや流し祓川　春波
川風り鳥帽子かへて流し祓ひ　既定
物まに重のかくきり川社ろ　白尼
川やし統の太鼓かなも　枚なき哉　浪花

形代
茅の輪
鷲羽遺言
腐草化蛍
暑

形代や男女なく志うしかし　櫻叟

子抱つれて茅の輪をくゞる女かな　旧國

急ぎて日にすむ鷲の羽音かな　日向　雪松

枯草の蛍となりて飛ぶ哉　江戸　卜宅

石も木も眼に光る暑さかな　去来

釣置く縁に渡し暑さ哉　好春

日の岡やこがれて暑き牛の舌　正秀

あ川お親やゝ子を見の臺所　尚白

兀山乃ちから及ぬあつさ哉　猿雖

暑よりやはりしづまる丘の蛍汲　丶

たゞ暑し籬によれば髪の蔭　九皐

小女の帯にくゝる暑さかな　其角

履とりて子に髪剃らす暑哉　それ

二三尺鶏も鳴してもあつさかな　魯町

石京の端に生れ暑さかな　松風

相の薬子埃の滝る暑さ哉　孤登

二本目の扇投おる暑哉　嵐窠

鶏も屍かつり走る迄あつさかな　風國

ての暑さ十方くれのあつさかな　毛紈

喰過の鼓にまはりる暑さ哉　波村

夕立

寝くるしう枕をうつ迄雲られ　江戸 翅石
浪くくと嶽より出る雲かな　雲鼓
拾ひ得れて三ツ星よ住居かな　後呂
あれ夕日やらぬいて通る馬の杖　兎士
ころてかれ洲かり見す雲かな　越お 玄駿
河嶋や桃ちる川が轍あらし　稀菱
白雨やひりくとや鳥の声　季由
夕立に走り下るや洲浜蝶　丈卓
白雨よ亀の〳〵月や出れ上　丶
白雨のあと水のこよ下駄そん　寛貴

夕立や浅ひふうるきかん　壬角
白雨や家ま出る鶏かな　丶
出まぬや緑も川夏日の夕　史邦
夕立の跡りかく雨の走るかな　梅譲
白雨や世ら付る秋の夜　暁烏
白雨降りそ出りのそらてん　許六
夕立や蓮の葉たたく池の声　呂龍
夕立の田畑降りかかる菜ちれ　正秀
夕立や川追上ぬきさる馬　丶
夕立や麻の白ひなれのける　徐寅

雲の峯

夕立や池のまさこの静し哉　濤川

雲の峯や松の溜く一もへし　尼 紫貢

白雨に京涼しさる金ぶり　巴風

夕立や人さ見鯉の眠さし　去芳

雨さしの格子みちふ夕立ぶり　手柳

経文さちや人かさく風燈海の上　珈琮

雲の峯や室越法くく円まる　一扇

夕雨や大佛京はし數き　康工

夕雨ふり抛掛ふ京おふら庵　諾九

竪雲めらの渡りくまさや雲の峯　閑指

照りまけて夕立雲の崩れけり　猿雖

雲の峰なんか嵐乃崩しても　𨳝貢

雲の峯何を出来して消ゆらむ　方山

飛社り太鼓打ける雲の峰　北枝

雲のうき空に似るかや小丈峻　江戸 桐雨

封らのかゝちなく出る雲のかね　原 歌鶯

迄雨の雲や芳根太郎あ根ぬる　許六

輪佳あめあしく數はる雲の峰　深苑

舟人衆採り笠や雲のさま　尚吟

夕くれや坑華ひさる雲乃巓　太会来

土用干

一竿は死装束や土用干　許六

夜着越着て何らへて見ゆる土用干　其角

鑓長くつゝみかねたる土用干　去来

土用干し屏風ハ常の置所　孤柳

虫干しや幕打かへて桜花　尾張　卜枝

虫干しや大道せばき薬種店　難波　伴好

土用しや三千余巻一所し　兀若坊

虫干や蟬の干物かくし所　武蔵　宗瑞

母人水底　揺秋見ゆる土用干　得牛

虫干しやふつゝか見えし我衣　風律

扇　団

そよ風の二房我ひろく扇かな　加賀　一泉

日南行郡思ふ文扇かな　一笑

さる人の紋見付たる扇かな　尚白

いかまゝ二本さしたる河ふ扇かな　安藝　周氏

碍て八ひろけて見る扇かな　猿雖

手枕の尤りつゝふあふぐ団かな　蓮之

急しき雁物のうちはかな　許六

奈良団扇の紙去風吹て　近江　袁立

一ツつゝあふひくむさしや団扇　寸長

丸い来ける四国の団扇かな　三筑

行拭

日傘

掛香

簟

寝ぬ人

朝水いつに捨る数行ゑひ　千那

行水ひ小松みなけく沖津風　嵐雪

我宿ひ夕れもそら出し行拭　出羽 風和

格子ありみそかしてさす日傘　方竪

暁ねさ参の古寺や日傘　備後 嘯月

うけ香や心を紙くくり遠ひ　卯七

雲に風人なりし匂ひ臭ば　長門 素道

宗なりに昼寝の夢や簟　芭蕉

おもかりて尾冷さもや大の虫　紀伊 先放

夜嫁の見ゆるも寝るや寝ぬ人　希因

抱籠

籠枕

涼

ねいとく涼しきる寝ぬ人　越後 李流

抱籠や夏も涼し八半から　山行

抱かこや君が心思ひまよし　君朱

月影のみれく涼しや籠枕　利合

すゞしさや夏もぬけゆく籠枕　乙由

涼しさや命あらく八日影　玄来

大影のちりても涼し水の中　涼寛

すゞしさやみ舟子か敷のちり髪　其角

すゞしさや牛の尾ふりて川の中　万乎

涼しさや木梅り刈薮つゞひ　才残

すゞしさや椽から足をぶら下る　文考
涼しさや塀よりのぞく柿の枝　卯七
すゞしさや飛ぶ川舩の帆はしらへ　正秀
帷子の背中吹ぬく風すゞし　倚門
涼しさや我来かゝる水車　木因
すゞしさや障子にひゞく水の音　一有
欄かけて井に涼しき障子かな　洒堂
涼風の国出る時を忘れけれ　素牛
すゞしさや竿につりつる鉤の糸　蘇葵
すゞしさや旅へ出る日の鉢の木　樗良

風薫

納涼

涼しさや直になさせし老の松　秋瓜
松杉をほめてや風のかほる音　芭蕉
さゞ波や風のかほりの相拍子　、
風かほる松の下露石ほし　京 澈士
松陰り入日あかれて涼しさよ　飛坡
すゞしさや川橋を四つ渡りけり　来山
破風口に日影やよはる夕涼　芭蕉
夕涼よくぞ男に生れける　松濤
鈍庵をむかし宗祇一夜涼みけり　去芳
夜すゞみや西山の居名月さえ　里圃

井水

つき立る帆はあつき秋や涼しき舟　丈草

第しい井汲出しくる涼しさや　近江 游刀

啓に墨つく硯のすゞし哉　千那

中ゐれ蝿をみて居る井のはたに　木導

夕涼しゆふ顔いらぬ見出しけり　乙由

果て汲命をつけ汁夕まぐれ　兎士

日枝下しけく寒る夜や涼床　慶元

今掬くみに家あり井の涼　柳枝

松の葉ふりくゞもてる井の竜　千代

水井や錦も花も濡る角　毛紈

清水

井水や蚊の落る数珠の限　巴風

掛ふ車流れく遠き清水哉　荷兮

さゞれ蟹足這のぼる清水哉　芭蕉

まつるの岩あしいきり流　猿雉

る柄杓を岩子まる辺清水哉　耕任

高念佛中も涼衣清水哉　丹波 ?扇

引立てゝゐたにのまゝ汲む清水哉　漆円

雲雀ゑのうひあそきれ山清水　桐之

松の色に藤のかゝる清水哉　一道

小川まで湧く流るゝ清水哉　尚白

さらし井
麻地酒
心太

藪道のはしにて結ぶ清水かな　徐寅
連ありて待せて起す清水かな　尾張 文深
汲かくす人まち顔に清水かれ　尾張 芳斗
桶ありて置て留守之苔清水　江戸 つ瑟
硯おく六部立てる清水かな　美濃 鳳朝
さらし井や庭うつ人の郷　桐雨
晒井や置あをざの庭　駿河 葉府
暮ともこや麻さへ見ゆる麻地酒　筑前 一招
清滝の水汲よせてところてん　芭蕉
順礼の木の下やん心太　其角

葛水
切麦
冷汁

四条の河原の涼みやところてん　秋之坊
雲の峯崩すや清き心太　伊勢 闇宝
冷るや桶の根葉やところてん　屋元
さゝ波も水にも角やところてん　江戸 貞佐
玉川の底に流れてや心太　信徳
すゞしさは葛の色なし水茶碗　巴静
葛水やきのふ吉野のもの語　美濃 廬解
切麦や涼しき影をかな見　支考
冷麦や芥子のまる摺鉢に　美濃 以貞
ひや汁や鉢うたゝよふ峯の雲

水飯
干飯
蔓切菜
香薷散
澡取
毛桃
楊梅
李
林檎

水飯やおもふ事なき顔のさん　丹後 百尾

干飯や花さへやくし旅のつま　鄙之

蔓切菜摘のゑらや菫花王　重頼

山水に浸りちらさし香薷散　舟竹

木のまから光る眼やちらしがき　芳菊

楊梅や千躰佛大小何も両枝　美濃 越紫

咲きの枝埒のくぼよ李ちり　路香

手に取るも林檎あり軸て西むし　金蘭

笑ひし顔り喰つく林檎かな　太音

紫葳
百日紅
瞿麦
蓮

冬までも百日紅か花あれ　涇故

ちりて咲しりて百日紅　千代

百日紅散るもさらばあれほし　京 麦宇

なでしこの手折こさへ哀しさ　性松

撫子を川辺に足のやけるとき　免貫

石竹や踏捌して見る露の玉　許六

撫子や咲ても暮るる花の色　希因

はれしや蓮にほひてみなるかな　湖春

喰の月茂きも やまとの窓　乙州

色より水よりのひらく蓮かな　挑拔

佛名を起く公卿みな蓮こり那　秋色

蓮の花折しハ雨の露ハ惠み之　古文彦

もとおけや緑ハかり抱蓮の花　伊勢尾 指風

手哉淺ひ揺気に成ぬ蓮の花　後君

日かり中ハよく雲死し蓮の色　以之

極楽の匂ひもうし葉れたれ　武中 杜亮

まこの花たゆむ不ハ響き良計　松柏

起く有ハ矢笑ん蓮の花　可風

蓮池やはきも獄の花ひらけ　江戸女 芳象

澤瀉
河骨
菱の花
蓴菜

古沼蓮や泉の有と思ひ居き　肥後 麻行

沢瀉も田草の数に引まれう　如行

沢瀉や弓箭立てて秋水の花　伊勢 素?

河骨やいくもて深き所流　随友

河骨の一輪つくと絶すると　大和 一窓

菱咲く雑候換ろ入江が　乙好

鳴の巣哉抱く咲や菱の花　里遊

引よくにもの庇ち吸鶯かな　尚白

蓴菜やあ哉ぬそく水の味　正秀

蕗ちるわぬかハの色れみりよ　蒼北

滝雲
蘭の花
藍川
鉄線花
眼皮
釣鐘草
凌霄花

こゝろふとさや良風出て雲となる　筑前 壺陶
水底に飛入る滝雲のそらおとし　錦酔
蘭の花はひとし水の濁りけり　竹翁
藍かりや濃の紅さ染る浮黄色　伊勢 風象
藍川の濁てこゝかしこ鉄線花　乙由
山伏が隠居や垣に鉄線花　麦元
花との釣鐘草の高れ哉　涼菟
釣の其手後に引る見事なし　哉人
のうぜんや松をたのみて登るとも　希因

蒲の穂
鷺草
虎の尾
風蘭
玉簪
雪の下

蓮の種やむかしかくろふ影の中　含霓
蒲の穂や子丸の抜て枯るゝ　可濛
鷺草や中が一羽立てり　伊勢 素道
風蘭は釣ぬかりけり竹の陰　希因
風蘭の色に寄添のそらかね　佐渡 文雅
風蘭は下に置れぬ句ひ哉　乙児
きのふや螢水捨し鉢の底　臥高
擬宝珠や菜截段さけるもの味　美濃 三伍
日さかりの蕊や涼しき雪の下　越後 春舟

射干

紫蘇

青鬼灯

赤芋

麻

小角豆

降やんで露りれ沼やまこの下　和竜

ひあふぎや御陵一ツほこらしし　風子

桂庵も加く数寄綺子のかざしかな　希周

花や茂り実やら淋し紫蘇の色　杏仲

鬼灯や青いものうら世に渡る　湯彷

赤芋や月に市をる水衣毛　重厚

あやふうる麻も真に一雨の跡　昵刀

夕山の空も分れくさくる麻　聴通

麻かりて風すなれ通る小家かな　斜嶺

たちはてぬ葉下に豆の九まささげ　亀翁

茄子の花

真桑瓜

茄子の花たまく若葉ぞ似てくるぶ　素堂

是や時の香さき揃へや茄子の花　吉詮　巴水

食ハやや出をて吹かずに喰ふ　湊紋　周雨

初真桑四ツにやわらん輪にや世ん　芭蕉

我に似れ二つに割れし真桑瓜　、

水かへて真桑冷し真桑瓜　游刀

瓜の皮水も踏まで流れけり　其角

大川や瓜や東風の浅一カし　支考

起って黒の跡はしられまま真桑かな　猿雖

瓜むくや男嫌ひの掃女　立吟

南瓜
夕顔

九ッ無滴く花さへ捨てゝ行青葉　巴静
青葉越く手で涼しまぎれ　蘇愛
南瓜のなりにひつきや茅の影　遊水
ゆふ顔や醉て顔出す窓の穴　芭蕉
捨盥や蕗な顔の日なたくら　香闌
夕顔てりいきなり葉もぎて　一笑
夕顔や淋しうすくて地蔵の舞　惟然
ゆふがほや泥鉢歩しき貌から　去来
夕貌や一丁のまふ夏豆數　許六
捨かねて顔の忍ちくく宵の園　三惟

夕顔の花の色見人の忘ゆゑ　飛水
ゆふがほの露は桶からこぼれ　尚白
ゆふ顔に昼伏刀收寒流　雪吟
夕顔花に夜ハからかな　乙由
夕がほや秋あ顔にのこりぬる　丶
拙婦が何かしの花も蓑借る　伊賀 氏寿
夕がほやあらしさへ八鉢たつ　尾張 可風
ゆふ顔や忍ぶ嵐の花さくへ　百明
ゆふ顔やもりと無理な念仏　伊勢 智奏
夕顔や子の遠さゝ捨ついで　松吾

昼㒵

昼皃や雨ふりたらぬ花の色　智月

昼顔や一夏山伏の峯つたひ　支考

ひるがほの花や蕣の衰時分　江戸　鋤立

皷子花や鮎のよりつく砂の上　播州　治足

ひる白や牛の昼寝を遠うさせ　不角

昼がほやさかりの露も分ぬ色　也有

ひる顔やのら麦ばさく垣の上　玄武

ひるがほの西つよさを昼寝鏡　千代

昼白や扇の張哉しほみから　己筑

ひるがほや田雞の声のはしる音　冬李

ひるがほやいそぐ暑さの絶ま出　諸九

昼顔や咲るゝしほく通り　美濃　以牛

楮の花
新雲花
雲奇峯
蟬

山中やこゝその花は青ぞめん　乙由

峠ほとゝ鳴て流るゝ雲雀　伊賀　猿雖

扨子なり風哉入やひきりたら　治足

やがて死ぬけしきも見えず蟬の声　芭蕉

負出して寝たに鈴ぞ鈴が声　嵐雪

慥うる枯木の梢や蟬の一念　其角

森の色々涼む部や蟬ゝ声　乙州

空蟬と参る文哉仕事から　丶

空蝉

飛ゆくの翁羽音添しや枝の蝉　北枝

蝉形や探くあけぬる枝　翁川

蝉殻や吉ふ多重葉の仕廻かな　支考

にうつぼやさし蝉の殻　徐風

つれ鳴も一日鳴やもとの急　小春

口ぬけし殻もかたに蝉の声　木兜

抱く木を其まゝ動さぬ蝉の殻　何風

我ひかり思へやくせの蝉殻　文嘉

殻にまた残る法音ふて蝉のから　去芳

目の玉を取て出けり蝉のから　渺高

夏虫

蠅

夏虫や火鉢取にまて死れ　伊賀 我峯

すゝきの紫にも添ゆ夏の虫　呂芳

いなびかりまゝちかれや火取虫　淡路 耽風

行羽能くさひあらくし夜の斗　閑更

蠅打て泊る泳られにける　千那

世の中八蠅にも多年の肩　竿水

蓋きれ出て引蠅の羽音かな　牧童

右しさや昼系けり牛の蠅　九言

牛の我勤め蠅のちからかな　兎士

類を縫て手をすむ蠅の憎さかな　日向 葉秀

蚤

蚋

毛虫

金亀虫

川狩

起侘る夏や紙帳の蚤の跡　千角

京清もあきれしの[illegible]　也哈

いたづらに蚋の細道小雨ふる　露舟

思ひ知れ[illegible]毛虫かな　風笠

踏付て[illegible]毛虫かな　辻風

[illegible]金亀虫　浅秋

川かりや[illegible]狩もあり　休菴

川かりや[illegible]月涼し　杜若

川狩や一日[illegible]簑の業　巴静

川かりや伊勢武者ひとり赤褌　巴丁

鯖鮨

晦月秡

沖鱠

夏痩

秋近し

川がりや上下の[illegible]見様　立和

鯖鮨や[illegible]出て千世常　露北

鯖つりや不知火[illegible]波の上　[illegible]

[illegible]晦月秡　雨路

[illegible]沖鱠　言水

沖鱠[illegible]加減　隆之

夏痩や[illegible]の[illegible]　支静

[illegible]涼みけり　風竹

[illegible]　芭蕉

秋近し[illegible]の後　真秀